

横浜市芸術文化教育プラットフォーム・トークシリーズ アート×教育 共有しあう役割を考える

## 『アーティストと協働した音楽の授業実践』

アーティストと協働した音楽の授業実践について、横浜市内の小学校で実施した作曲家・宮内康乃さんの取組を事例に、東京学芸大学准教授の石上則子さんとともに考えていきます。

新学習指導要領で示された音楽科が担う「学び」とは？

それに対して、アーティストや文化施設、芸術団体はどう協働できるのか？

そんな視点から、アーティストが学校教育に関わることの意義や可能性について、お話しいただきます。

### ◆講師プロフィール

#### 石上則子 / いしがみ・のりこ (東京学芸大学 准教授)

東京都の小学校にて、音楽専科教諭として長年音楽教育に取り組む傍ら、特別活動や総合的な学習の時間などにも深く関わる。最後の勤務校では、創立 50 周年行事委員長としてその責務を果たす。また、長年にわたり東京都小学校音楽教育研究会 (都小音研) 即興表現研究会の代表を務め、都小音研研究部長や副会長などを歴任し、東京都の音楽科教育の向上に力を注ぐ。音楽づくりを研究課題とし、文部科学省・東京都立教育研究所 (現教育研修センター) の講座や研究、NHK の教育音楽番組等にも協力する。現在、東京学芸大学准教授、日本女子大学・東京藝術大学非常勤講師として、後進の指導に当たる。日本オルフ研究会会員。日本音楽教育学会会員。

#### 宮内康乃 / みやうち・やすの (作曲家)

東京学芸大学 G 類音楽科作曲専攻卒業、情報科学芸術大学院大学 (IAMAS) メディア表現研究科修了。楽譜ではなく、声や呼吸など、身体の自然なリズムを生かして音を紡ぎ出す、独自の表現に取り組む作曲家。2008 年より音楽パフォーマンスグループ「つむぎね」を立ち上げ、活動を開始。おもに声と鍵盤ハーモニカを使い、空間全体に響きを生み出す、音楽と舞台表現を融合したユニークなパフォーマンスを展開する。2008 年度トーキョーワンダーサイト主催「Experimental sound, art and performance festival 2008」にて最優秀賞受賞。また近年、そのシンプルな誰でも参加できるアプローチを、多くの人と実践する活動「わ・つむぎプロジェクト」を開始し、老若男女さまざまな人たちと、それぞれの身体ならではの響きを紡ぎ出す活動を精力的に行っている。2011 年、第 6 回 JFC 作曲賞受賞。  
[つむぎね] <http://tsumugine.com/>

### ◆参考文献・ウェブサイト

- ・新学習指導要領 (平成 29 年 3 月公示)  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/1383986.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm)
- ・石上則子監修(2016)『「音楽づくり・創作」の授業デザイン あすの授業に生かせるアイディアと授業展開』、教育芸術社
- ・石上則子(2017)『「音楽科の目標」に見られる改訂の主旨に着目して』教育音楽・小学版 2017.6、P26-29
- ・edy classic : 「響き」の本来の力へ。楽譜を手放した作曲家・宮内康乃インタビュー①、②  
<http://edyclassic.com/38/>

平成30年2月19日(月)

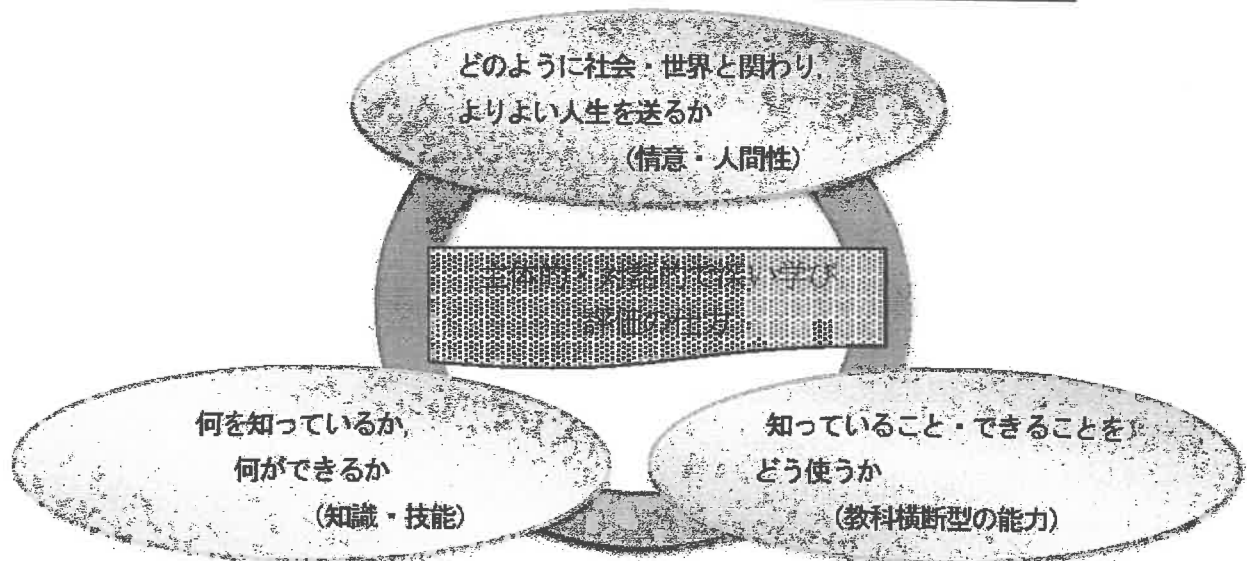
横浜市芸術文化教育プラットフォーム・トークシリーズ

# アーティストと協働した 音楽の授業実践

東京学芸大学 音楽教育学 石上則子

よりよい学校教育を通じて、よりよい社会をつくる  
という目標を学校と社会が共有して実現

これから求められる子供の能力「3本の柱」〈21世紀型能力〉



## 社会に開かれた教育課程

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- ② これからの社会を創りだしていく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自分の人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。
- ③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

## アーティスト側の課題

- ① 現在の学校の在り方を知る。
- ② 関連する学習指導要領について理解する。
- ③ 伝えたいことと求められることの誤差を検討する。
- ④ 担当学校の状況を把握する。
- ⑤ 担当教員との連携を取り、子供の学びを明確にする。

## 学校側の課題

- ① 予算がない。子供の数が減り計画が立てられない。
- ② 学習量が増加し、文化的な行事を入れられない。
- ③ 子供とともに学ぶ。
- ④ 事前・事後の学習を充実する。
- ⑤ アーティストに求めること、アーティストの思いを把握する。
- ⑥ アーティストとともに授業をつくる。
- ⑦ 教科・領域間の連携を考える。

## アーティストと協働した音楽の授業の意味

- ① 社会に開かれた教育課程の実現のために
- ② カリキュラムマネジメントの一環として
- ③ 子供たちの学びを広げ高め深めるために
- ④ 教師の学びを広げ高め深めるために
- ⑤ アーティストの活動の場として
- ⑥ 未来のアーティストや聴衆を増やすために

## 協働の実際と今後の展望

- ① 新潟市の場合
- ② 大学と小金井市等の連携
- ③ 自らの実践〈アフリカンミュージック、弦楽四重奏、パーカッションの音楽、郷土の音楽〉
- ④ 今後の展望
  - ・ 「社会に開かれた教育課程」として要望が広がる。
  - ・ グローバルな社会に対応する文化としての音楽が求められる。
  - ・ アーティストと学校を結ぶマネジメントの重要性がクローズアップされる。
  - ・ 音楽文化の発信の場としてのホール等の解放と学校との連携が求められる。